

コメント： 歴史的な問いに対して物語批評は有効か？

石川 立

本発表は、「正典の4福音書の中のユダヤ人に関する記述は、歴史的事実を反映しているのか、それとも物語の中で虚構的に描かれているのか」という問題提起のもと、4福音書をそれぞれ物語批評の方法論によって分析しています。そのさい、物語分析において標準項目とされる、Structure/Form（構造／形式）、Rhetoric（レトリック）、Setting（状況設定）、Character（登場人物）、Point of View（視点）、Plot（筋書き）の6つの分析項目にしたがって、それぞれの分析項目の観点から、各福音書がユダヤ人をどのように物語っているかを考察しています。

ここから判明したことは、各福音書における記述は統一されておらず、それぞれの福音書記者（あるいは各福音書の背後にある共同体）の意図を反映した創作的な部分が大きいということでした。

以上から、福音書に描かれた「ユダヤ人」の像は「歴史か創作か」という冒頭のテーマについて、「一定の歴史的内容をもとにはいるが、相当多くの部分が創作されたものである」という答えが提示されるにいたっています。

4福音書全体を「ユダヤ人」の観点から6つの分析項目に応じて読みなおし、考察することは、福音書を読みなれていないと困難な作業だと思われます。私たち自身も同様に物語批評の方法でユダヤ人の描き方を確認しようとするとき、発表者の提示した分析結果がおおいに参考になるものと考えられます。

さて、発表者の労に感謝するとともに、この発表について私が問題に感じたところを率直に述べさせていただきます。

1. 方法論についての問い

当発表では、まず問題が提起され、その問題を解決するために、物語批評という方法を採用することが、いわば宣言されています。

問題提起は、「正典の4福音書の中のユダヤ人に関する記述は、歴史的事実を反映しているのか、それとも物語の中で虚構的に描かれているのか」というもので、この問いは歴史的な問いだろうと思います。物語の中だけの構造やレトリックやプロットなどを

コメント：
歴史的な問いに対して物語批評は有効か？

考察するのではなく、歴史的事実を反映しているのかという問いです。70年から100年ごろまでに書かれた4つの福音書の記述と、その時代、あるいはイエスの時代の歴史的な事実としての実際のユダヤ人との比較、ないし、関係を問うわけですから、これは歴史的な問いです。

歴史的な問いであるかぎり、この問いは物語批評だけでは解決できないだろうと思います。

4福音書に物語批評を適用しようとしたときに、既にこの4福音書は「物語」であると規定されています。物語であれば、多かれ少なかれフィクションであることは当然なので、4福音書は「一定の歴史的内容をもとにしてはいるが、相当多くの部分が創作されたものである」という答えは、物語批評を適用した時点でもう出ていたということになります。

物語批評という方法そのものに問題があるわけではありません。この方法論が聖書を理解するとききわめて有効であることは認めます。しかし、歴史的な問題提起をする場合、物語批評だけでは、到底、きめ細やかな結論や答えは出てこないだろうと思います。

4福音書に対しては物語批評を適用することでいいでしょうが、他方でやはり、比べるべき歴史的な事実を確認する必要があります。歴史的な事実を確認したうえで、4福音書のユダヤ人の描き方と実際のユダヤ人を比較し、原始キリスト教に対する実際のユダヤ人の関係を考察する必要があるのではないのでしょうか。そうしなければ、4福音書が描くユダヤ人と実際のユダヤ人の一致も不一致も確定できませんし、原始キリスト教に対する実際のユダヤ人の関係も明確にはならないのではないのでしょうか。

2. 問題提起についての問い

歴史的な問いに対して物語批評だけを適用した場合、4福音書は「一定の歴史的事実（内容）をもとにしてはいるが、相当多くの部分が創作されたものである」という大雑把な結論しか出ないことは当然かと思えます。

しかし、私たちの知りたいことは、それにとどまらず、「どの程度そうなのか」ということです。「一定の歴史的事実（内容）をもとにしてはいるが」と言っても、「どの程度、歴史的な事実をもとにしてはいる」のか。「相当多くの部分が創作されたものである」と言っても、どの程度創作されているのか——そういうことを知りたいと思います。

そして、それはなぜなのか。なぜ、創作するのか——それを知りたい。実際のユダヤ人の原始キリスト教に対する関係は「こうこうこう」だった、ところが、福音書ではユダヤ人はこんなふうに描かれている。なぜ、このように描いているのか——そのあたり

を知りたいと思います。

物語批評では作者の意図は問わず、読者への効果が大切なポイントになります。ですから、歴史的な問いに対しては物語批評だけでは不十分なのです。

問題提起は、「正典の4福音書の中のユダヤ人に関する記述は、歴史的事実を反映しているのか、それとも物語の中で虚構的に描かれているのか」というものですが、この問題提起が、前提となっている物語批評という方法論によって予め制限されてしまっていると思われまます。

3. いつの時代の「ユダヤ人」か

「一定の歴史的事実（内容）をもとにしてはいるが、相当多くの部分が創作されたものである」との結論ですが、その歴史的事実というのはいつの時代の「ユダヤ人」のことなのでしょう。

大きく言って、2つの時代が考えられます。イエスの時代のユダヤ人。そして、福音書が編纂された時代のユダヤ人です。イエスの時代にさかのぼる伝承を基にした記述なのか、福音書記者がまさに体験しているユダヤ人に対する反応なのか。

「一定の歴史的事実（内容）をもとにしてはいる」というだけでは曖昧すぎます。どの時代の「歴史的事実（内容）」なのかをはっきりさせる必要があります。

4. ルカ文書の扱いについて

ルカによる福音書には「使徒言行録」という続編があります。そこでは、言うまでもなく、ペテロやパウロたち、初期の使徒たちの働きが物語として記述されているわけですから、ルカによる福音書に関して考察する場合、「使徒言行録」にまで及ばなければ不完全な考察になるだろうと考えられます。

今回は4福音書に限った考察ということでしょうが、ルカによる福音書を全体的に扱うのであれば、必然的に「使徒言行録」をも扱わざるをえないということにはならないでしょうか。

5. 異邦人についての考察

原始キリスト教にとって、ユダヤ人問題は、裏を返せば異邦人の問題であったと考えられます。元をたどれば預言者のときからですが、新約の時代にいたっても、ユダヤ人

コメント：
歴史的な問いに対して物語批評は有効か？

に関しては、ユダヤ人の救済思想が何よりも問題になったと思われます。つまり、救いに民族的な制限がかけられていることが原始キリスト教にとっては何よりも問題でした。異邦人にも、いや、異邦人にこそ救いはあるとの主張が新約聖書を一貫しています。

そうだとすれば、ユダヤ人の考察と共に、異邦人の考察をしなければ、この考察は不完全なものになるのではないのでしょうか。

以上、当発表に関して5つほど問題と思われる点を挙げさせていただきました。これらについて、応答していただいたり、検討していただければ幸いです。